

学 位 論 文 題 名

『源氏物語』 宇治十帖研究

学位論文内容の要旨

本論文の内容は以下のとおりである。

【序】研究の細分化により解体され断片化された『源氏物語』を、改めて総体として捉え返すべく、いわゆる宇治十帖(橋姫巻～夢浮橋巻)を対象に、薫と宇治の三姉妹(大君・中君・浮舟)との関係に焦点を絞り、〈後見〉の視座から本文を読み直してゆくとする、本論文の基本姿勢が表明されている。

【第一章】長大な『源氏物語』を締め括る宇治十帖が生み出された決定的要因は、従来その第二部(若菜上巻～幻巻)にあることが強調されてきたが、一方で、第一部の巻々(桐壺巻～藤裏葉巻)から宇治十帖へと繋がる確かな線として〈後見〉という主題が存在したことを説く。と同時に、光源氏の〈心の闇〉について、これまで指摘されてきた兼輔歌・『伊勢物語』のみならず、新たに『うつほ物語』をも前本文として加味して読むことで、親子／男女の危うい関係が焦点化され、そこに〈後見〉の問題が浮上してくるさまを論じ、光源氏の恋の特性を明らかにしている。なお、本章は、以下宇治十帖論のための序論的意味合いを有するものである。

【第二章】宇治十帖を理解するためには、男主人公である薫像を正しく把握することが必要であるが、本章では、その一手段として、宇治の三姉妹との対面場面における薫の呼称の分析を試み、語り手によって薫がどのように捉えられ呼ばれているかを明確にし、さらに、相手の女性の呼称との関わりを考察した結果、『源氏物語』宇治十帖が男女の恋のアイロニカルなありさまを描出していることを指摘している。

【第三章】宇治十帖始発部の橋姫・椎本両巻を通じて薫像が定立するさまを分析する章。薫については従来、「恋」と「道心」の観点から論じられることが多く、その内面形成に論点が集中しがちであったが、本章は、「まめ人」である薫がいかにして恋の道に踏み込んでゆくのかという物語内での機能に重点を置いて論じ、そのような視点から橋姫巻を読むことで、これまで薫の行動力を奪うものとされてきた弁の尼の問わず語りを、むしろ、彼を罪から解放し恋情の発動を可能にする事件だったと位置付け直す。

【第四章】薫と大君の物語に〈後見〉という補助線を引いて読み解く章で、父八の宮はいわれてきたごとく薫に結婚を頼んだのではなく、〈後見〉を依頼したと解釈すべきであり、第一章でみた光源氏の恋から継続する〈後見〉における男女関係の曖昧さがここでも主題になっていることを焙り出す。また、大君の薫拒否も彼に対する嫌悪感ゆえではなく、〈後見〉不在による結婚への諦念や薫自身ないしその家柄に対

する劣等感といった要素が大きいことを、大君の心内描写から抽出している。

【第五章】本章では、中君の独詠歌全三首を和歌と散文の関わりに注目して考察し、和歌それ自体は三首とも男(勾宮)に飽きられた女の嘆きとして読まれかねないものの、それらが前後の散文と響き合うことによって女の嘆きとして定位することを免れ、宇治へと回帰する中君の個別的心情が前景化する仕組みになっていることを論証する。あわせて、三首を含む場面にはいずれも「かげ」の語が配されており、「かげ」＝庇護下の意から、〈後見〉がなければ生きてゆくのも困難な女の立場が暗示されているとも述べる。

【第六章】『源氏物語』においてただ一回だけ現れる「しのすすき」という歌語を、地の文のありように注目しつつ検証することで、宿木巻の当該贈答場面に新解釈を提示した章で、従来薫を暗示するとされてきた勾宮歌の下句「招くたもとの露しげくして」が、実は中君を指す表現であることを明らかにし、さらに、この解釈は旧来の薫像の見直しにも繋がるものであることを指摘する。

【第七章】本章では、大君と浮舟をつなぐものとして両者の死の決意に着目し、それぞれがどのような経緯により死を決意するに至ったのかを追究した結果、原因となる外的条件が発生し、それを受けて心内に変化が生じるといった、単純な因果律で物語が構成されていること、および、二人の女が単に薫を拒否するのではなく、どちらにも彼に対する好意がはっきりと認められることを改めて確認する。

【第八章】これまでその正体の詮索に議論が集中していた手習巻のものけについて、浮舟を入水による死から救い出家へと踏み切らせることを可能にし、薫が浮舟をまったく理解しないままで終わる物語の結末を必然的に導く装置としての機能をこそ重視すべきであると説く。

【結】薫の政治的資質や行動は一切問題にならず、薫の権力を支える構造も脅かされることなく、宇治の三姉妹との恋が語られる宇治十帖は、〈後見〉に象徴される「男」と「女」の美しくも交わらない関係を語る巻々であると規定し、本論文を総括する。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 後 藤 康 文
副 査 教 授 富 田 康 之
副 査 准教授 大 西 郁 夫

学 位 論 文 題 名

『源氏物語』宇治十帖研究

審査の方法および経過

平成 19 年 6 月 1 日 第 1 回審査委員会 査読用申請論文の配布および日程調整
平成 19 年 6 月 29 日 第 2 回審査委員会 申請論文の問題点指摘および質問事項の整理
平成 19 年 7 月 6 日 第 3 回審査委員会 口述試験の実施および学位授与の可否判定
平成 19 年 7 月 9 日 第 4 回審査委員会 報告書の作成および点検

審査の概要

1) 本論文の観点と方法

本論文は、親子でも男女でもありうる〈後見〉という曖昧な立場に『源氏物語』のひとつの主題を見出し、その視座から、橋姫巻から夢浮橋巻に至る最後の十巻＝宇治十帖に描かれた薫と宇治の八の宮の三人の娘との恋のありさまを再検討するものであり、作品本文を虚心かつ丁寧に読み解くことにより創見を導き出す方法が、各章に共通して用いられている。

2) 本論文の研究成果

本論文には、論理の低回や叙述の停滞が散見され、内容的にも、学界を震撼させるほどの衝撃性は認められないが、八百年に余る研究史を有し、年間三百編を超える論文が公表されているこの作品の研究状況に鑑みるならば、従来の定説を根底から覆す画期的な新説や、これまで誰ひとり発想しなかった斬新なアイデアを提出することは、何人にも至難の業といわざるを得ないのが現状である。したがって、本審査委員会としては、本論文が、そのような事情を抱える大作に堂々と対峙し、膨大な研究史を丹念に繙いたうえで、いくつもの創見を揺るぎなく提示している点を重視し、『源氏物語』研究に新たな一頁を加え得たものと判断して、その成果を高く評価するに吝かではない。なお、本論文第一章の素稿は、

『人物で読む源氏物語・光源氏Ⅰ』（勉誠出版）に気鋭の源氏学者たちと競演するかたちで光源氏論の執筆を任されたものであり、また、第五章・第六章のそれも、審査制度のある論集ないし学術雑誌に掲載されたものであることを付け加えておく。

3) 学位授与に関する委員会の所見

上記の審査の結果、本審査委員会は、全員一致で、本論文の申請者保坂智氏に対し、博士（文学）の学位を授与することがふさわしいとの結論に達した。